## 4.平成19年度の取組

平成19年度は、改善したカリキュラムにより、歴史的・文化的視点からの導入環境教育の充実を図ります。また、高学年配当の科目においては、授業および現場体験を通して、環境問題について複眼的視野を養うことを目的に、環境総合教育の一層の展開を図ります。また、環境教育の充実を図るために、E-learningのシステムを活用して、教材作成を積極的に実施していきます。さらに、フィールド学習の成果を中心として、本学の環境教育の成果を公表し、外部との交流、情報交換を積極的に展開します。具体的な取組としては、次のようなものが挙げられます。

導入環境教育を充実させるため、全学部の1年生を対象とする総合講座「歴史・文化的視点からの自然との共生」を設置します。その設置の目的は、第1に、環境考古学や近世史から、私達の祖先が循環型社会を構築し、環境を大切にしつつ、どのように生活していたかを学ぶことです。第2に、私達の祖先は、自然との調和の中で生活していたのですから、その生活の裏付けとなっていた宗教や思想、たとえば、神道的自然観を学んでいきます。また、人々が、生活の智恵と経験について民話などの民俗文化を創り出し、その伝承によって自然との調和がとれた生活を維持していったことを学びます。第3に、明治以降の近代化の中で、産業化の弊害として自然破壊や公害問題が生じたことを学びます。第4に、公害規制の法律が整備され、その後、自然環境の保護のために規制強化や犯罪取り締まり強化が行われてきたことを学んでいきます。

平成19年度に「環境と開発98」を履修する学生は、フィールド学習として、千葉県鴨川で借りた田圃（棚田）において古代米の栽培を行います。その際、学生は、水質測定器を使って、農業に適した水の質を学びます。また経済学部の演習を履修する学生は、戦前から深刻な公害を引き起こした渡良瀬川、地元の渋谷川などの水質測定をして、水質汚染の状況について学ぶことができます。さらに、経済学部の授業では、国の内外でのフィールド学習（現場調査実習）を活発に展開していきます。

国際的視点の養成のために、海外の協定校からの交換留学生を対象とする英語による授業においても、環境問題を積極的に取り上げていきます。また、中国の協定校の学生とのセミナーを、夏季休暇あるいは冬季休暇に実施します。本学の学生が中国の協定校を訪れて、そこで教員および学生と意見を交換するとともに、本学が作成したE-learningの教材を提供して、将来にわたる環境教育の連携を図ります。

E-learningシステムを活用して、さらに教材作成の作業を進めます。また、これらの教材を、学生が本学の情報システム（K-SMAPY）から利用できるようにするため、委託によりK-SMAPY適合ソフトの開発を行います。

2年間の取組の総括をするために、公開フォーラムを開催いたします。このフォーラムには、学内の教員や学生のみならず、本学の取組に関心ある多数の外部者、NGO、NPOにも参加してもらい、相互コメントを通して本学の環境総合教育について外部からチェックしていただきます。

今年9月に岩手・紫波町の山林で本学学生と地元住民とで行われた間伐作業